

秋の伝道礼拝第1回 (10月12日)

生きよ、新しい

心と霊を造り出せ

小海 基



エゼキエル書18章31〜32節

エフェソの信徒への手紙4章21〜24節

10月の伝道月間のテーマは「新たに生まれ変わる」です。今回は外部講師として花巻教会の鈴木道也先生をお迎えします。先生が

2024年11月に刊行された『違いがありつつ、ひとつ 試論「十全のイエス・キリスト」へ』は惜しくも2025年キリスト教書店大賞を逃しましたが、大反響を巻き起こしました。それは今、日本基督教団がある意味で行き詰まっている、教条的に一つの主張を押し通し、分断を起している執行部の在り方に異議申し立てをしているからです。そうしたことはキリスト教界の歴史の中で何度も起こってきたことです。

そもそも初期キリスト教の「正典化」の歴史の中で様々な「キリスト像」「終末観」を示す4つの福音書が選ばれ、「違いがありつつ」、「ひとつ」の「十全のキリスト」を伝えていった姿勢を本書は説得力を持って論証しています。

私達の荻窪教会も、日本基督教団という合同教会も将来に向かっての使命と課題を確認する時となっています。若い鈴木先生から「違い」があり「多様」であるからこそ見えて来る「一致」を確認し、聖書の示す恵みの深さに耳を傾けてまいりましょう。

鈴木道也先生は1983年生まれなので私の25歳年下です。東京神学大学を出て花巻教会に赴任され12年目を終えるところ。先生には自伝的説教をお願いしています。先生が11歳の時に召天された御祖父さんは青山学院神学部卒でバプテスト教会の牧師として隠退されるまで広島で約40年牧会しておられました。広島なので深く関係されたのが自分自身も含めて戦争責任のことを問い続けてこられ

た、そういう牧師だったと著書に書かれています。

今日読みましたエゼキエルという預言者はエレミヤとほぼ同世代に当たります。バビロニア帝国によつて南ユダ王国が滅ぼされるのに立ち会った世代です。エレミヤもエゼキエルも出身が祭司の血筋の預言者です。ただしエレミヤはエルサレムの監視の庭の水溜めに吊り降ろされて死ぬ寸前で引き揚げられてそのまま監視の庭に留め置かれて、エレミヤがバビロニア軍によつて解放された後、エルサレムが陥落するのを目の当たりにした預言者でした。

一方のエゼキエルは相当高位のエルサレム神殿の祭司の家系であつたのでしょうか。ダニエルたちとともに、紀元前597年の第1回目のバビロン捕囚でバビロニアに連れて来られ、そこでバビロニアがエルサレムを紀元前586年に陥落させた知らせを聞くわけです。

鈴木先生が御祖父さんから戦争

責任の話を聞かされていたように、エレミヤもエゼキエルも自分たちの出身の家である南ユダ王国の祭司階級が国の存亡の危機の時に、神様に立ち返ることを呼びかけもせず、むしろ王と一緒になつて墮落の道、亡国の道をけしきけていったことを激しく糾弾し、滅びの預言を伝えていったのです。

エゼキエル書は全部で48章ありますが、前半の24章は大変厳しい警告と裁きの預言をし、のちに祭司職にある人たちの腐敗と墮落が糾弾されています。しかしちょうど真ん中の24章でエルサレムの滅亡、そしてエゼキエル自身の妻の死が知らされると、エゼキエルの預言は一転して25章以下は希望に満ちた新しいイスラエルの回復というテーマに変わります。

今日読みました18章も前半の一部であり、ここでもエルサレムの陥落、滅亡、裁きの預言のクライマックスが述べられています。それは絶望で終わるのではなく、悔い改めて新しくやり直す未来であり、新生の道を始める時なのだと

呼びかけている所です。

私たちが、もうダメだと思っから絶望なのではなくて、そこから新たにされる道への分かれ目であるということはこの預言の言葉は語っています。なるほどこの章の6章あとの24章でバビロニアによってエルサレムは陥落させられ、バビロン捕囚は実に70年続いていくわけです。

しかし、それが結末ではなく、後半部分で、また第二、第三イザヤで読むように、捕囚から解放されて「新しい心と新しい霊」をもって再建していくという新しい歴史が始まるのです。

聖書の神様は、かつてアブラハム、イサク、ヤコブを選ばれ、エルサレムの民に出エジプトの出来事まで起こして約束の地カナンに導いたように、神様の思いは「滅び」にあるわけではないのです。「イスラエルの家よ、どうしてお前たちは死んでよいのだろうか。……立ち返って、生きよ」(エゼキエル18・31〜32)というのが神様の思いであり約束なのです。

エゼキエルの預言の特質は、単に民全体あるいは国全体が回復するとか悔い改めるとかに留まらないうで、個々人の内面の回復があつてこそ全体の回復が起こるのだというところがこの長い48章に及ぶエゼキエル書の中で繰り返し述べられている点です。11章19節がそうですし、今日の箇所も、36章26節以下、37章14節など4回もそのことが語られています。

新約聖書に親しんでいる私たちから見て「新しい心」の「心」は分かるのですが、「新しい霊」の「霊」が分かりにくい。「霊」はヘブライ語で「ルーアハ」といいます。「風」「方向」「息」とも訳せるのです。エゼキエルの預言の中では「霊」とは人間の主体的な思い、ここである「心」とほぼ同義のようですが、後半になればなるほど、「霊」は神様から与えられるものと変わっていくのです。「風」のように人間が制御可能なものではなくて、それこそ私たちが新約聖書の中で、聖霊とか御霊(みたま)のように神様から送られるものになっているのです。

今日読んだ旧約の箇所はまだエゼキエル書の前半なので「新しい心と新しい霊を造り出せ」となっています。人間の決意や覚悟で制御が可能なのです。でも、ここを「新しい風を造り出せ」と訳せばそれはそれで大変インパクトのある訳となるでしょうが、新共同訳の訳者たちは両方の含みを持たせて訳していると思われます。

今日読みました新約のエフェソ4章22節以下でも呼びかけがなされています。まるで服でも脱ぐように「古い人を脱ぎ捨て」「心の底から新たに」されることが出来る筈だと呼びかけられています。

日本の国もそうです。先週終わりに長年続いて来た連立政権が解消され、政権交代もありうるかもしれないというニュースが飛び交いました。裏金議員を再登場させ、お金や票田によって踊らされ、悪名高い団体と癒着するなどといった古い体質から、新しい風を吹かせていけるかどうか問われ始めています。たとえ滅びの時代が来るとしても、捕囚の時代が始まる

寸前だとしても、だからこそ、ここで絶望してすべて投げ捨ててしまふのではなくて「新しい心と新しい霊を造り出せ」という呼びかけに応え、古い自分を脱ぎ捨て、それを実現出来る者たちに自由な日々が戻って来るのです。それが実現に至るのは自分たちが生きていく間かどうか分かりません。70年先になるかも知れないけれど、その神様の約束を信じていくようにエゼキエル、第二、第三イザヤは私たちに告げているのです。

神様の約束を信じる群れに自由な日々が戻ってくるのです。それを信じるかどうかの分かれ目に私たちは立たされているのです。私たちは信仰者としてそういう選択をしていかなくはなりません。

牧師の代替わりを迎える荻窪教会の将来に向かって、新しい心、新しい霊を造り出していく、そういう祈りの中で、私たちは神様に委ねながら変わっていかねければならないのです。

(出席27名。文責・編集委員会。要約担当・市川義和)